生涯学び続ける力を育てるために

―幼児理解と保育士の援助に関する考察―

○松尾真理・岡本京子
（神石高原町立保育所）

乳幼児期の子どもは，発達に個人差があるため，子どもひとり一人に応じた対応をすることが重要である。しかしこれまでは，保育士自身の保育経験や考えのみで，子どもを判断することや評価することが多く見られた。

そこで，本研究では，日々の保育での行動観察に加えエピソード記録を用いて保育実践のあり方について検討を行っている。

＜方　法＞

エピソード記録の収集をする。事例研究をする。事例研究を基に，育ちと援助につてまとめる。研究成果をまとめる。

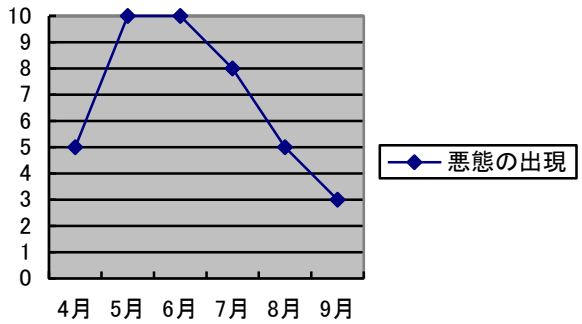
実践対象者：保育園児５歳児１名，３歳児１名（男子１名，女子１名）を対象に行動観察を行った。

調査方法：行動観察は，設定保育中の子どもを保育士が観察を行い，子どもたちのエピソードを基に，子どもたちの内面を理解し援助について考察する。

＜結果および考察＞

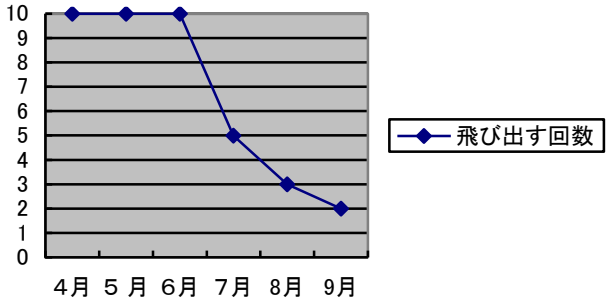
行動観察の結果：まず，５歳児Ｒは集団の中で自分の思いを通そうとすることが多く見られる，言葉や態度で強くだしてしまう。

５歳



次に３歳児Ｎは，活動の説明を落ち着いて聞くことができないため，集団での活動になるといつも室内から飛び出し一緒に活動することが難しい，又，保育者の指示を言葉としてとらえられても，いろいろな想定ができないので行動することが難しい。

３歳　飛び出す回数



新しい保育所保育指針では，子どもの主体的活動の重要性を示している。主体的に子どもが活動できるようにするためには，保育士の適切な関わりは非常に重要である。３学期までのエピソードから，育つ課程や援助の傾向を探った事例であるが，幼児の育ちは一律でないことや，育ちに節目があることが明確になったことが成果であった。保育士が，幼児の日々の何気ない言動をみのがさず丁寧に見取ることが幼児理解につながり，内面を理解した援助が望ましい育ちにつながることを確認できた。

保育所において，幼児が友だちや保育士と安心して過ごせる生活や意欲を持って遊びに取り組む生活となるための保育士の役割として次のことが大切であるということが分かった。①エピソード記録を基にカンファレンスを行い様々な角度から理解をする。②幼児の内面の理解を確かなものにする。③その場や状況を的確にとらえ援助する。④幼児が示す言動の背景を探り，言動を肯定的に受け止め，援助する。

又，設定保育中の保育指導案を毎回記入することにより，保育中の指導と支援の割合などを調査し，子どもたちの発達に適した保育を提供していく事がよりよい子どもの成長を手助けになると考えられる。